慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	漱石のスイフト観について
Sub Title	Soseki's view of Swift
Author	海保, 真夫(Kaiho, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1966
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.22, (1966. 11) ,p.66(38)- 83(21)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00220001-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

漱石のスイフト観について

Sōsēki's View of Swift

海　保　真　夫

I

夏目漱石に関する研究は枚挙に暇の無いほどあるが，英文学と彼との関係を論じたものは比較的少ない。その方面の著作の僅かなことに加えて，英文学が彼にとって否定的な意味しか持たなかったと一般に考えられているからであろう。「文学論」の序文に見られる英文学への呪詛や，「吾輩は淡泊を愛する茶人的猫である」のような読者の微笑を誘う「猫」の一節など，英国を含めて西欧文明への激しい反発を彼の文章に発見するのは容易である。したがって彼を「明窓浄机を好む東洋文人」とみなす傾向が支配的であるのも当然かもしれない。

しかしながら読者が日本の作家に通常期待しないものを彼の作品が提供していることも否定できない事実である。度々言及されている磯田多佳への手紙にしても，約束の不履行をなじる容赦ない不正の追求は，常套の日本人観からは想像し得ないものであろう。もとより日本的あるいは西欧的という観念は曖昧であり，彼をどちらかに断定した場合，その反証は幾多も提出されると思う。しかし generalization の無意味なことを承知して敢えて述べるならば，漱石は同時代人に比較して，西欧の思想と共通なものをもっとも多く有する作家であった。彼の執拗な非妥協的な倫理観は日本的というより西欧的なものである。繰り返し表明する英国への憎悪や，俳句や漢詩に親しみ，「私を去る」ことを説いたのは，むしろそうした倫理観につきまとう醜さへの反発であり，自己と異質のものへの憧れであったといえないだろうか。芥川龍之介は師を評して，次のように語っている。

> お前は文墨に親しんだ漱石先生を知っているかも知れない。しかしあの気違いじみた天才の夏目先生を知らないだろう。　「闇中問答」
>
> 僕はいつか夏目先生が風流漱石山人になっているのに驚嘆した。僕の知っていた先生は才気煥発する老人である。——僕は先生の事を考える度に老辣無双の感を新たにしている。　「文藝的な，餘りに文藝的な」

これは歪められていく漱石像へのいかにも芥川らしい抗議である。彼の語ったように，漱石はけっして洒脱を旨とする風流人ではなかった。執拗な執念深い自己主張こそ彼の本質であった。辰野隆の言葉を借りれば，「則天去私は永遠に漱石の理想として遥かなる彼岸に霞んでいた」のである。否，激しく反発しながらも，自己の本質にこそ安住の地があることを漱石自身認めていたのではないだろうか。「曽

て英国に居た頃，精一杯英国を悪んだ事がある。——けれども立つ間際になって，知らぬ人間の渦を巻いて流れている倫敦の海を見渡したら，彼等を包む鳶色の空気の奥に，余の呼吸に適する一種の瓦斯が含まれている様な気がし出した」という「思ひ出す事など」の一節はその率直な告白であると思う。

漱石は Samuel Johnson と同様に，彼等の作品にもまして，その人間が読者の関心を誘う数少ない作家の一人であった。作品を理解する際の一助として彼の人間を知るのではなく，作品は漱石という更に興味深い存在への一つのよすがに過ぎないのである。Points of View において，Somerset Maugham は Johnson 博士について次のように語っている。

> Him we know as we know hardly any character either in real life or in fiction. His true devotees love him not only for his personality, for his wit, his common sense and his kindness; they love him for his faults——

同様の気持を，読者の多くが漱石に対して抱いているに違いない。彼等は漱石に関するあらゆることを知ろうと願うのである。彼の全集に marginalia までが所載されるのはけっして編者の義務感だけが原因なのではない。したがって英文学が漱石にとって少なからざる関係を有する以上，これに注目することは決して無意味ではないと思う。もとより彼の英文学の造詣に立ち入ることは容易な仕事ではない。「文学評論」の一篇に関して，以下に行なう試みはこの至難の事業へのささやかな一歩である。

II

朝日新聞に迎えられる際，漱石が出した条件の一つに「新聞に不向なる学説の論文等は無断にて適当な所へ掲載の自由を得度と存候」という項目がある。これより判断すれば，彼には英文学研究を続ける意志があったのかも知れない。しかし事実は以後ついになんらの研究も発表することがなかった。「文学論」と「文学評論」は入社後に出版されたものであるが，両方とも教師時代の産物である。他の英文学に関する著述も入社以前に書かれたものであり，いずれも短いものに過ぎない。「文学論」は材料の多くを英文学に採っているとはいえ，英文学そのものを論じたものではない。したがって英文学者漱石の面目を伝えるものは「文学評論」であるといえよう。

この作品は世評に高く，斎藤勇博士は「英文学史」のある版において，日本人の手になる最高の英文学研究と評しており，正宗白鳥は「漱石論」のなかで，小説を書くよりも「文学評論」と同じ試みを十八世紀以外の時代にも，行なって欲しかったと語っている。これらの評価はそれぞれ意義があるにしても，注釈を必要としよう。「文学評論」は著述に該博な知識を要求する作品ではあるが，内容はむしろ概論である。前篇は事実の羅列であり，本文をなす五人の作家に対する著者の批評についても，意見を異にする読者もあろう。しかも少なからぬ注目を集めるとすれ

ば，作品の長所は作者の学識以外のものにも求めなければならない。

第一に，「文学評論」に限らず漱石の全ての作品が，作中に述べられてある見解の適否を越えて，既に読者を捕えていることである。Gray や Milton に対する酷評に驚きつつも，Maugham が *Lives of the Poets* を楽しんで読んだように，Pope や Defoe に関する漱石の否定的な批評に異議を抱くとしても，読者は「文学評論」に興味を覚えるのである。彼の個性をそこに発見するからである。作品に接する以前に，読者は批判する力を奪われているといえよう。

第二に，「文学評論」が面白く読めることである。学問上の述作が文学的にも優れていることは望ましいことには違いない。しかし文学として優れていることは作者の学識とは関係のないことである。「文学評論」に語られているものは特殊な事実ではない。読者は予備知識を持たずに，理解することができるのである。いわば平凡な材料に過ぎぬものを活かしているのは，作者の学識というよりは，彼に多分に恵まれていた sense of proportion に因ると思う。Macaulay の *History of England* の名声は昔日の如くではないが，歴史家によって指摘されている作者の政治的偏見が原因なのでは決してない。読者の不満は語られる事実の価値の軽重を作者がわきまえていないことにある。すなわち sense of proportion に欠けているのである。Macaulay の博学は有名であるが，博学の人間の常として，彼は自己の知識を残らず作中に収めねば承知しない男であった。*History of England* の印象が散漫であるのも当然である。十九章に kerchief à la Steinkerque の由来を述べて，Voltaire の *Le Siècle de Louis* XIV を典拠にしたと断わっている。わざわざ真面目に断わるところが Macaulay たるゆえんで，読者の嘲笑を買うばかりである。この瑣末事が両者の作品の主題にいかなる関係を有するかはしばらく措くが，Voltaire の場合はいささかも笑止な感じを与えない。彼の "supercilious indifference" とも呼ぶべき記述態度のゆえに，読者は述べられる事実が場違いなものとは感じないのである。同じ材料を扱いながら，作者の技量がいかに作品の巧拙に関係するかを示す適例である。「文学評論」の成功は作者の「下らぬことながら一言しておく」という Voltaire 的な尊大な態度に一つは負うのである。これは英文学者としてより，創作家漱石の功績というべきである。*History of England* の名声の失墜が作者の学識に無関係な如く，「文学評論」が今日なお読者を有するからといって，これによって作品の学問上の価値を推測することはできない。

以上の事実，即ち漱石が「文学評論」に関係なく既に読者の関心の的になっていること，「文学評論」には文学としての面白さが大きく入りこんでいることの二つがこの作品を純粋に学問上の著作として考察することを困難にしているのである。「文学評論」に名著の誉れがあるのはけっしてゆえ無きことではない。しかしそれを，挙げて作者の学識にのみ帰するのは危険であろう。

Ⅲ

「文学評論」のなかで特に注目されているのは Jonathan Swift を批評した第四篇である。正宗白鳥は Hazlitt や Thackeray の Swift 批評を凌ぐと激賞しており，事実漱石の Swift 論は日本において現在もなお支配的であるといってよい。以下にその前半の内容を簡単に紹介する。

> Swift は諷刺家である。諷刺とは不満足の発露であり，不満の対象を攻撃する手段の一つである。不満の対象は Pope の *Dunciad* のように個人的な場合もあり，Addison や Steele 等の如く社会の悪習である場合もある。これらの作家の場合，諷刺の対象が除かれたとき満足が得られるという救いがある。不満の対象以外の点では満足しているのである。Addison, Steele 等は当時の英国を最善の時代であると信じていた。彼等の不満は些細なものに過ぎず，その他の点では社会の提供するものをそのまま肯定して，すこぶる得意であった。
>
> これに対して Swift の諷刺の対象は人間そのものにある。人間を腐敗堕落せるものとみなし，その改良の可能性を否定したのである。したがって人類は滅びの日にいたるまで救われることがない。Swift の文学は厭世文学である。
>
> それでは Swift にそのような絶望感を抱かせた原因は何か。彼の住める英国は政治的にも光明を認めた時代である。Addison や Steele にいたっては太平を謳歌してはばからなかった。Swift の厭世観が時代思潮の反映ではあり得ないことは明らかである。彼の絶望の声は 18 世紀とは無関係のものである。したがって永遠の不満の原因は彼の人格に求める他はない。彼はその一生において，あの激しい憤怒を正当化するような事件に遭遇したのであろうか。
>
> （ここで漱石は Swift の生涯を分析し，その厭世観にもっとも寄与したものとして，彼の病気とそして公人として目撃した人間の腐敗に対する公憤の二者であろうと推定している。）

要約すれば漱石の Swift 観は以上のものになる。きわめて理路整然としていて，その結論は抗し難い。常々作品の批評は自己の見識に基づいて行なうべきであると主張している通り，彼の Swift 批評は Swift の作品に対する彼の個性の直接的な反応である。それを強靱な頭脳が支えているのである。その Swift 論の形成に他の評者が介在した跡を発見するのは困難である。Johnson の *Lives of the Poets* は Addison を論じたなかに引用されており，Thackeray の *English Humourists* は Tristram Shandy 論の冒頭に言及されている。したがって漱石とかなり見解を異にする両者の Swift 論は当然彼の脳中に存在していたはずであるが，共に「文学評論」においては無視されている。Leslie Stephen の Swift 小伝は比較的漱石の意見と似通っており，allegory の分析にも共通点が見られるが，これについても直接の言及はない。文中に引用されているのは Scott の *Memoirs of Jonathan Swift* のみである。しかしこれは伝記的事実の典拠として利用されているに過ぎない。

「文学評論」の序言において，外国文学を批評する態度として，自己の判断に基づいて批評するものと，学説史的なものとの二つが挙げられているが，漱石の Swift 論が第一の態度によっていることは明らかである。徒らに洋人の説に追随することの愚を戒め，自らの判断に信頼して恐れることのなかった彼の態度はいかに賞讃しても足りることはない。しかし自己の見識にしたがって判断しうるものは作品の文学的価値，すなわちその出来栄えに限られるはずである。Swift の厭世観と時代思潮の関係は事実の問題であって，評者の批評眼の鋭さが決定する事柄とは思わない。また Swift の厭世観の出処を彼の個人的体験に求めるべきだと主張したにもかかわらず，漱石はその努力を十分に果たしているだろうか。彼は Swift の伝記的事実の悉くを Scott に仰いでいるが，Scott の *Memoirs of Swift* がはなはだ不完全な伝記であるのは遺憾である。*Journal to Stella* は Swift の書簡のなかでも特異な存在であるが，これにもさして注意を払わなかった。「文学評論」には二度引用されているが，一つは冒頭の部分に過ぎず，一つは Oxford 伯を謝罪させた有名な個所で，*Memoirs of Swift* にも出てくるものである。漱石は後者を引用して，Oxford や Bolingbroke などは Swift の「同輩と云わんより，或点から云えば幕僚の感がある」と語っているが，*Journal to Stella* を通読して，そのような印象を受ける人は少ないと思う。また Swift と Vanessa の関係を論じて，「彼も大分この女に心を移したものと見えて，『ステラへの日誌』の中の或箇処は大分調子が違って居る」といっているが，これは Scott の受売りであろう。Swift, Stella, Vanessa の三角関係を知るために *Journal to Stella* を読もうとする人があれば，失望するだけである。

以上のことを述べたのは faultfinding が目的ではない。日記や書簡，メモワールの類の文学に対して，漱石の関心が比較的薄かったことを指摘したかったのである。事実を事実そのもののゆえに興味を持つことは楽屋のぞきの卑俗にしばしば堕する。彼はそうした危険に極度に敏感であった。しかし結局実証的なことよりも，普遍的命題を扱う方が彼の気質に適していたのではないだろうか。これは漱石の長所でもあり，短所でもあった。事実を整理して結論を引き出す彼の論理の過程には目覚ましいものがある。しかしその基礎となる事実にときとして不確かなものがあったことは否めない。18世紀は文学が周囲の社会ともっとも密接な関係を有していた時代である。単に Addison や Steele との比較を基礎に，Swift の人間観を時代に無関係なものとみなす漱石の見解はすこぶる大胆であるといわねばならない。以下に Swift のその時代に対する反応を考察して，私なりの Swift 像を提出してみたい。

Ⅳ

しかしその前に，敢えて Swift に限らず，一個の人間の生涯を研究する態度について私見を述べておく。Swift は文学史上の謎とされてきた。厖大な資料の存在に

もかかわらず，彼の一生には今なお不明の部分が少なくない。こうした人間を論ずる際に，しばしば犯す誤りは，彼の行動の奇なるがゆえに，その原因もまた奇なるものと推定することである。一例を挙げれば，彼の復讐心は確かに異常であった。Somerset 公夫人は彼の mortal enemies の一人であるが，彼の夫人に対する執拗な憎悪は，二人の間に特別な事情の存在を想像させる。しかし実際は，つまらぬ原因に端を発しているのである。二人の確執は 1709 年に Swift が William Temple の覚書きを出版したときに始まる。この覚書きには Temple の妹 Giffard 夫人の友人である Essex 夫人の亡夫を攻撃した個所があった。それで Giffard 夫人は友の気持を傷つけることを心配して，その発表を望んでいなかった。Swift はおそらく金の必要に迫られてのことと想像されるが，無断で出版した。このとき Essex 夫人の姪である Somerset 公夫人が Giffard 夫人に送った手紙に次の一節がある。

> I remember we both agreed with you that it was not proper to be made public during my Aunt Essex's life, and I am sure Dr. Swift has too much wit to think it is, which makes his having done it unpardonable and will cofirm me in the opinion I had before of him that he is a man of no principle either of honour, or of religion.
>
> （伯母の生存中にあのメモワールを公にするのは望ましくないということに，私どもの考えが一致していたように記憶しております。Swift 博士はそれを御承知ないほど愚かな方ではありますまい。それだけに此の度の御仕打ちは許し難く思われます。以前から博士が名誉心も信仰もお持ちでないと考えておりましたが，あらためて思い知らされた気持でございます。）

夫人の非難は Swift の耳にも入ったが，当座は沈黙を守った。しかし終生消えざる恨みを抱いたのは事実で，以後機会ある毎に悪口を繰り返し，夫人の死後も復讐を忘れなかった。*Gulliver's Travels* の "It is observed that the red-haired of both sexes are more libidinous and mischievous than the rest." (Book IV ch. 8) という一節が夫人の赤毛を諷したものであることを知れば，喧嘩の原因は兎も角，その執念深さには敬服する他はない。

Thackeray は Swift のこの種の行動を評して，次のように皮肉をいっている。

> if, undeterred by his great reputation, you had met him like a man, he would have quailed before you, and not had the pluck to reply, and gone home, and years after, written a foul epigram about you——watched for you in a sewer, and come out to assail you with a coward's blow and a dirty bludgeon.

Swift の怨恨は平凡な事実に原因している。批判を憎み，冷遇を憤り，渉々しく行かない昇進に不満を抱く点では，常人の場合となんら異なるところはない。もし彼に尋常ならざる面があるとすれば，それは怒りの執拗なことである。彼の行動を観察する際に，その憤怒や苦悩のはなはだしきゆえに，その原因もさだめし異常であろうと想像する評者の多いのを見て，余計なことを述べた。

Swift の出生や Stella との関係についても奇想天外な説が幾つかたてられている。これらの説の荒唐無稽に過ぎないことは，Middleton Murry の評伝や Harold Williams 編の *Journal to Stella* の序文に詳しいから，ここには述べない。Swift の生涯に推測を必要とする部分があるのは事実である。しかしその推測は常識を伴うべきであろう。常識とは華々しい言葉ではないが，我々の想像以上に貴重なものである。Scott の *Memoirs of Swift* が多くの誤りを持ちながら，今日もなお読むに値する作品であるのも，著者に備わるこの貴重な属性のゆえに他ならない。因みに批評家としての Scott はけっして軽視し得ないと思う。

以下に述べる Swift の幾つかの aspects は相反する場合があるかも知れない。これは彼を特に矛盾した存在とみなす立場をとるためではない。《il n'y a point d'unité complète dans l'homme, et presque jamais personne n'est tout à fait sincère ni tout à fait de mauvaise foi》という人間観は昨今誰もが口にするらしいが Swift の生涯もこの人間観の真なることを証明する一例に過ぎないのである。

V

漱石が主張したように，Swift がきわめて冷ややかな人間観を抱いていたことは疑い得ない。*Gulliver's Travels* の完成後，彼は Pope に次のように書いている。

> I have ever hated all nations, professions, and communities; and all my love is towards individuals——but principally I hate and detest that animal called man, (Sep. 29, 1725)

また *Upon the Excellence of Christianity* という題の説教文において，人間は生来利己的な存在ゆえ，来世における報酬，もしくは罰という教理のみが人間の利己心に訴え，善をなさせ，悪に走るのを防ぐと説いている。これに類する見解は Swift の作品の随所に見られる。漱石はこのような冷笑的な人間観を Swift 独特のものとみなし，時代の思潮と無関係であると主張した。この主張は正しいだろうか。Addison は Swift に比較して皮相であるという批判を漱石から浴びているが，彼の次の文章は Swift と人間観を同じくする作家の一人に止まらないことを物語っている。

> I must confess, there is nothing that more pleases me in all that I read in books, or see among mankind, than such passages as represent human nature in its proper dignity. As man is a creature made up of different extremes, he has something in him very great and very mean.——On the contrary, I could never read any of our modish French authors, or those of our country who are the imitators and admirers of that trifling nation, without being for some time out of humour with myself, and at everything about me. Their business is to depreciate human nature, and consider it under its worst appearances.——In short, they endeavour to make no distinction between man and man, or between

the species of men and that of brutes. *Tatler*. No. 108.

すなわち Addison は人間の存在そのものを非とする，いわゆる「全面的諷刺」を行なう人々に反論しているのである。漱石によれば Swift はこの「全面的諷刺」を行なう作家であるが，この文が発表されたのは *Gulliver's Travels* の出現より遥かに以前のことである。また Addison が Swift を念頭に置いてこの文を書いたわけではもとよりない。

人間を生来利己的なものとみなす Hobbes や La Rochefoucauld の説に追随した王政復古後の傾向は 18 世紀初頭になお強く残存していた。Swift はこの傾向を代表する一人に過ぎなかったのである。彼の人間観を時代に超然とせるものとみなす漱石の主張は明らかに誤りであった。彼をしてこの重大な事実誤認をさせた原因は何であろうか。「文学評論」において 18 世紀の思想上の背景を伝えるものとして，漱石の引用している書物は Leslie Stephen の *English Thought in the Eighteenth Century* である。18 世紀の思想の概略を目的とするこの書にはもとより 17 世紀人たる Hobbes は，18 世紀の思想家が彼の哲学にいかなる反応を示したかという点でのみ言及されているに過ぎない。Hobbes の Swift に及ぼした影響などはこの書からは知る術もないのである。9 章の 5 節に，Hobbes の著作は 17 世紀後半及び 18 世紀の前半の英国思想界に大きな反響を呼んだが，それは共鳴というより反論であったと Stephen は記している。たしかに Hobbes の説を全面的に容れる者は少なかった。しかし清教徒の専制に飽いていた王政復古後の英国において，清教徒的な「偽善」を排し，人間を裸の姿に見る，すなわち人間は生来利己的な存在であると考える彼の説が広く人心に投じた事実を見逃してはならない。この意味で Swift が Hobbes の信奉者であったことは，彼が偽善者の集団とみなしていた非国教徒に対する嫌悪と軽蔑によって明らかである。また "Rochefoucauld who is my favourite because I found my whole character in him" と語っているように，『箴言』は Swift の愛読書であった。意識していたか否かは別にして，人間性悪説を自己の人生観にした一群の作家が存在し，Swift もその一人であったことは，B. A. Goldgar 著 *Curse of Party* に詳しく述べられている。Addison 等は Swift との友情にもかかわらず，思想的には世代を異にする人々であった。彼等は 18 世紀を代表し，Swift は 17 世紀後半に属していたのである。しかも注意すべきことは，後者の勢力が 18 世紀に根強く残り，Addison 等の人間の尊厳を主張する新思想と対立していたことである。すなわち Addison 等が人間性善説を唱えたのは意識的な行動であって，漱石の批判したように徒らに太平楽をきめこんでいたわけではない。

Stephen の書が漱石を誤らせたのは，単に Swift の思想の背景を示唆し得なかったという否定的な意味のみに止まらない。大胆な憶測をすれば，次の文を含む 12 章 47 節以降の箇所こそ，漱石の Swift 観の形成にもっとも寄与したといえないだろうか。

Swift stands in fierce isolation amongst the calmer or shallower intellects of

his time, with insight enough to see the hollowness of their beliefs, with moral depth enough to scorn their hypocritical self-seeking, and with an imagination fervid enough to give such forcible utterance to his feelings as has scarcely been rivalled in our literature. But he had not the power or the nobility of nature to become a true poet or philosopher or reformer. When a shallow optimism is the most living creed, a man of strong nature becomes a scornful pessimist.

Swift は時代の代弁者であると主張する R. Quintana の次の言葉は漱石の見解と真向から対立するものである。

Of the many misapprehensions of Swift none is wider of the mark than that which represents him as a satirist who wrote out of a bitter mind and a bitter heart, who saw only man's ineptitude and failure, and who despised his fellows because he first despised himself.

Swift : An Introduction. ch. 2

Quintana の主張は極端であろう。Swift の人生観はやはり自己の性格や体験にも由来すると思う。しかしその人生観を促進させたのは，漱石の認めなかった当時の思想傾向の一つなのである。時代に無関係ではけっしてなく，むしろ Swift は滅びゆく旧思想を代表する一人であった。「文学評論」の読者には想像し得ない因習的な面を Swift が多分に持っていたことは否み難い事実である。

VI

Swift は 1745 年に死んだ。ラテン語の自撰の墓碑銘を Middleton Murry は次のように英訳している。

The body of Jonathan Swift, Doctor of Divinity, Dean of this Cathedral Church, is buried here, where fierce indignation can lacerate his heart no more. Go, traveller, and imitate if you can one who strove his utmost to champion liberty.

Swift に自己を自由の代戦士と呼ぶ権利を与えたものは Drapier's Letters 事件を中心にする 1720 年以降の 愛蘭土における彼の行動であろう。しかし彼の意識にある自由とはごく狭い意味での政治的自由に過ぎなかった。当時の英国には既に信仰の自由，言論の自由，出版の自由を主張する人々がいたにもかかわらず，Swift はこれらの自由にきわめて否定的な態度をとった男である。

当時非国教徒の存在は黙認されてはいたが，彼らには公職への参与の禁止などの制限が課せられていた。国教徒のなかにも この種の制限の緩和を 唱えた人々がいる。低教会派と呼ばれる人々である。Swift はそれとは反対に強硬な高教会派であり，非国教徒に公職を許可することには絶対に反対で，存在を黙認してもらえるだけでも感謝すべきであるというのが彼の主張であった。次の文において彼は国民の

大部分が非国教徒に好意を抱いていないゆえ，できるだけ沈黙を守って国民を怒らせないようにするのが非国教徒にとって得策であると勧めている。

The Dissenters have no game left, at present, but to secure their "indulgence": In order to which I will be so bold to offer them some advice. First that—they would take care not to provoke, by any violence of tongue or pen, so great a majority, as there is now against them; nor keep up any longer that combination with their broken allies; but disperse themselves, and lie dormant against some better opportunity.

Examiner. No. 36. April 12, 1711.

Tale of a Tub にも非国教徒への悪口を発見できるが，彼らへの憎悪は Swift に生涯つきまとう強迫観念の一つである。あの読んで楽しい *Bickerstaff Papers* でさえも，Partridge が非国教徒であったことが Swift の怒りの一因になっているのである。*Memoirs of Captain Creichton* なる不愉快な作に彼が名を貸したのも，こうした彼の偏見が原因であろう。liberty of conscience という言葉は彼には一種の cant としか映らなかったのである。しかし非国教徒への嫌悪は彼一人の偏見ではなく，Cromwell の施政にうんざりしていた国民一般の気持であった。Swift はこの国民感情を共にしたのに過ぎないのである。

La nation.....la nation est lasse de ces messieurs qui s'appellent de noms barbares et qui lui chantent des psaumes. Chanter pour chanter, mon cher Planchet, j'ai remarqué que les nations aimaient mieux chanter la gaudriole que le plain-chant.

Swift が非国教徒の公職参加の禁止を主張したときに挙げた理由は，彼らの国政参与は国家や教会の破滅に通じるということであった。この主張の適否は別にして，彼が真剣であったことは疑う余地がない。彼にとって国教会は終生変ることのなかった唯一の忠誠の対象である。しかし国教会が国家にとって不可欠の存在であるとする彼の主張を裏付けるものは何もない。存在するゆえに維持する必要があるとするのが唯一の解答であろう。Swift はこのような疑問には悩まなかった。

出版の自由は表現の自由につながるが，これについては Milton が既に主張している。Swift が徒手空拳の身で，あの名声を得たのは彼の文才によることは断わるまでもない。彼ほど出版界に多くを負っている男は少ないのである。しかし彼は出版の自由に懐疑的であった。*Journal to Stella* には三文新聞の横行に対する彼の憤激が諸所に見られる。

A rogue that writes a newspaper called *The Protestant Post-boy*, has reflected on me in one of his papers; but the secretary has taken him up, and he shall have a squeeze extraordinary.

Letter XXXII. Oct. 10, 1711.

新聞が自分の悪口を書いたので，大臣がそいつを逮捕した。

痛い目にあろせてやると語っているのである。当時 Swift が代弁者を勤めていた Tory 政府は，政府誹謗を旨とする出版物を一掃する目的で，印紙法を 1712 年に成立させた。すべての新聞にその大きさに応じた額の印紙を貼ることを命じた法である。その結果殆どの新聞は潰れ，*Spectator* は値上げを余儀なくした。もっとも J.M. Thomas の *Swift and the Stamp Act of 1712* によれば，Swift はこの法律の成立には直接の責任はないそうである。その頃は与野党の対立が激しく，おのずと目にあまる応酬が両者の間に見られた。その模様を Voltaire は次のように伝えている。

> La moitié de la nation est toujours l'ennemi de l'autre. J'ai trouvé des gens qui m'ont assuré que Milord Marlborough était un poltron, et que M. Pope était un sot——Marie Stuart est une sainte Héroïne pour les Jacobites ; pour les autres, c' est une débauchée, une adultère, une homicide.
>
> *Lettres philosophiques.* Vingt-deuxième lettre.

この有様だから Swift が出版の制限を唱えたのも無理はない。しかし彼の政治上のパンフレットも第三者から見れば，反対党のものと同様に partisanship の産物に過ぎないのである。

以上に述べた例にも明らかなように，Swift は自己の信念に従って事態に臨むというよりは，事態の性質によって自己の態度を決定する人であった。信仰の自由でも，出版の自由でも，それらが観念としてのみ存在する限り，彼には是非を論ずる価値を持たなかったのである。したがってある一つの観念をもって彼の行動を計るとき，しばしば矛盾が見られるのも当然である。自分の置かれた状況によって，その観念に対する彼の見解も変化したからである。これをもって彼を opportunist として非難するつもりはない。自己の信念を貫くためには死をも辞せずとする人々はしばしば他人の生命をも軽んじてはばからない。彼らの行動が常に善をもたらすわけではなく，むしろ逆の場合の多いことは，宗教戦争などの例にも明らかである。しかし Swift の処世態度がこうした危険を意識した結果であるとは考えられないし，また彼の判断が必ず肯綮にあたっていたわけでもない。一見したところ機会主義者に見える彼の行動は，彼が観念を論ずること自体に嫌悪を感じていた結果であると思う。形而上学への憎悪は数多い彼の偏見の一つであった。彼は神学博士であるが，その方面の著作は皆無である。キリスト教の秘義は神意によって秘義とされたものゆえ，これを説明することは神意に悖ると彼は主張し，わずかに残る説教文にも，教理に触れたものはない。論客としての Swift の特徴は論争の主題に正面から取り組むことを避けた点にある。継承律を危うくしているという非難を Whig 派が Tory 政府に浴びせたとき，Swift はそんな事実は存在しないゆえ，論ずるに値しないと答えている。彼の得意にするのは相手の文章にけちをつけたり，文法に叶っていないと嘲弄することにある。彼の敵である Steele や Burnet にしても，挙足の取られやすい男であったから，Swift には恰好の攻撃目標であった。しかし顧みて彼等の確執の原因を考えるとき，Swift の立場は必ずしも名誉あるものとはいえ

ない。悪口にかけては端倪計り知るべからざる彼のことである。読者には彼が正しく，敵の方が馬鹿に思えてくる。おかげで論争点がぼやけてしまうが，それが目的であったに違いない。一例を挙げよう。

十七世紀後半のフランスに「古今優劣論争」なるものが起こった。その顚末は渡辺一夫博士の「へそ曲がりフランス文学」の6章に記されている。これを英国に持ち込んだのが Swift の庇護者である Sir William Temple で，きっかけは彼が1690年に発表した *Essay on Ancient and Modern Learning* にある。Temple については Macaulay の酷評が今もなお支配的であるが，Voltaire は *Le Siècle de Louis XIV* のなかで褒めちぎっている。両者とも誇張が多いから，そのつもりで読むべきだろう。Middleton Murry はかなり Temple に好意的で，再評価しょうとする気持がうかがえる。Swift 自身は生涯 Temple に敬意を抱いていたようだ。さてこの Temple が *Essay on Ancient and Modern Learning* において，古代人の優越性を主張し，Phalaris 書簡を賞揚した。それを Richard Bentley が書簡の偽物であることを指摘したことから，Bentley と Francis Atterbury を中心にする Christ Church Wits との間に論争が起こった。Temple のような貴人に Bentley 如きが文句をつけるのは無礼であるというのが Atterbury らの言い分である。誤解してはならないが，英国の古今優劣論争の直接の原因は Phalaris 書簡の真偽であり，しかも Bentley の指摘した通り書簡は偽物であったことである。Atterbury らが Bentley の学識に太刀打ちできないことは断わるまでもない。しかし押しの強さの前に真理が屈するのは現今のみとは限らないらしく，世評では Atterbury 側の勝利と伝えられた。論駁の余地のないものを見事に論駁してのけた Atterbury の才には驚嘆するばかりである。Swift の *Battle of the Books* は Atterbury らの尻馬にのって，Bentley 攻撃に一役買って出た作品である。もとより Phalaris 書簡の真偽を論ずるだけの古典語の知識はないのであるから，これには全然触れていない。Bentley の顔がまずいとか，動作が不恰好であるとか，下らぬ悪口を並べたものに過ぎないが，面白いのは事実である。Swift が論争に際し，搦め手から攻めることを得意にした点に，彼と思想を同じくした人々に共通する面を発見できると思う。すなわち17世紀後半の諷刺家の特徴である反知性主義である。Swift の科学に対する軽蔑は *Tale of a Tub* や *Gullivers Travels* などに発見できるが，他方 Addison が科学を重視したことは *Spectator* によって明らかである。この点にも二人の思想上の相違をうかがうことができる。

女性観についても，両者を比較した場合，Swift の古さは否定できない。彼が Stella, Vanessa と呼んだ二人の女との関係は有名で，Edith Sitwell が彼らをモデルに *I Live under a Black Sun* というつまらない小説を書いたほどである。したがって二人に対する Swift の態度はまことに弁護し難いものであったとだけいっておく。彼の女性観を知るのに恰好の作品として *A Letter to a Young Lady* がある。これは真面目なものであるが，それだけに彼の女性に対する軽蔑は一層明らか

である。これに対して，Addison らの異性に寛大であったことはよく知られている。これは Swift にとり常に嘲笑的であった。

I will not meddle with *the Spectator*, let him fair-sex it to the world's end.
Journal to Stella. Letter XL. Feb. 8, 1711--12.

Swift は理性を行動の指針として勧めているが，これはきたるべき世代に支配的になる sentimentalism への抵抗とも考えられる。しかし彼は理論家ではなかったから，理性に定義を与えることができなかったし，また彼の描いてみせた実例もみじめな失敗に終わっている。*Gulliver's Travels* の第四篇に読者が嫌悪を覚えるとすれば，それは Yahoo の醜さのためではなく，理性に従って生きる Houyhnhnm の社会が死んだ世界だからである。Swift 自身の行動から判断すれば，理性とは absence of passion を意味するらしい。この理性に対する解釈は，女性に限らず，Swift の対人関係において，相手を傷つけることが多かった。自然な心の動きに素直に従うことは彼にとっては反理性的な行為だったのである。

Written upon Windows at Inns, in England.
The glass, by lovers nonsense blurr'd,
Dims and obscures our sight :
So when our passions Love hath stirr'd,
It darkens Reason's light.

政治家としての Swift について委曲を尽くすことは容易ではない。したがって政活的にも彼が同時代の人々の多くと意見を共にしたこと，そしてその意見は彼が抱いた殆どの信念と同様にやがて滅びてしまったことだけいっておく。D. P. French が *Swift, the Non-Jurors and Jacobitism* に指摘したように，彼の一生は表面上は変節の連続であった。William 三世の頌歌をつくりながら，一方では William への臣従を拒否した Sancroft を称えた。1701 年に *Contests and Dissentions in Athens and Rome* を発表して Whig 党と関係を持つが，1710 年 Whig 内閣が崩壊して，Tory 政府が出現すると，Tory 党に迎えられ，Examiner 紙に拠って，政府の弁護と野党の攻撃に力を尽くした。Anne 女王の死と George 一世の即位により Whig 党が政権を握ると，英国を去り，愛蘭土に忠誠の対象を発見した。そして愛蘭土の特殊性から再び Whig 的な考えを持つにいたるのである。しかし我々は彼が理念の行動に先行する男でなかったことを想起しなければならない。Whig 党は次のように主張した。「王も臣民同様法の制限を受けるべきである。王が法を犯すとき，王は臣下に忠誠を要求する権利を失う。臣民は合法的に王に反抗することができる。1688 年の革命が合法的であるならば，1640 年の議会の行動も同じく法に叶うものである。」この論理は確かに論駁し難い。清教徒革命が発端において，1688 年の場合以上の革命的変化を目的にしていなかったことは，Clarendon の *History of the Rebellion* から推察できる。後に王党派の支柱になった Clarendon も，Strafford 弾劾の際には議会側の一員であった。現在こそ Strafford の死は清教徒革命への第一

歩とみなされているが，その時は Cromwell の出現は予想されてはいなかった。1640 の革命が 1688 年の場合と同様に「名誉ある」結末を迎えてならない理由は無かったのである。Aldous Huxley が Ends and Means において賢明なことをいっている。

> For ever-increasing numbers of men and women, "historicalness" is coming to be accepted as one of the supreme values. This implicit identification of what ought to be with what is effectively vitiates all thinking about morals, about politics, about progress, about social reform, even about art.

この言葉に勇気を得て，大胆な主張をしよう。最初の革命が Cromwell の専制に終わったのは必然の成行きではなかった。「名誉革命」が政治上の進歩であるならば，この進歩を最初の革命の産物にすることは不可能ではなかった。結末こそ大きく異なるが，両者とも頭初は同一の目的を持っていたのである。

したがって 1640 年の議会の行動は叛逆であり，1688 年の James 二世の追放は法に叶うものとする Tory 党および Swift の主張には矛盾がある。この矛盾は当時の国民感情によって理解できよう。国民は元来政治に無関心であるが，もしいくらかでも興味を抱くとすれば，彼らは Tory 派であり，Stuart 王家の支持者であった。「名誉革命」も必要悪としか考えなかった彼らが Charles 一世の死をもたらした革命を合法化するはずがなかった。Johnson の例でもわかるように，英国人の Stuart家に寄せる愛惜の情は理性では説明できないものがある。Swift の矛盾もその一例に過ぎないのである。彼は Whig 派から裏切り者と罵られた。彼が幾度か試みた自己弁護も読者を必ずしも納得させるものではない。しかし彼を利欲によって行動したと断ずるのは酷であろう。Bertrand Russell が "You forget that you are not living in 1688, when your family and a few others gave the king notice and hired another". と誇らし気に語る彼の祖先とは Orford 卿 Edward Russell を指すのであろう。この著名な Whig 貴族が William 三世に忠誠を誓いながら，廃王 James 二世に秘かに通じていたことは周知の事実である。Orange 公の英国人に対する軽蔑の増加に大きく寄与した Russell のような腐敗した政治家と Swift の動揺とを同一視してはならない。彼の矛盾は同時代人の殆どが共にしたものである。すなわち Stuart 家への忠誠と James 二世の追放とを論理的に結びつけることができなかったのである。唯一の解答である Whig 党の主張を容れるには Swift はあまりにも保守的な男であった。

最後に，文学者としての Swift について述べる。彼の名声が *Gulliver's Travels* などの文学作品にかかっていることは断わるまでもないが，彼は著作をもって生活の資としていたわけではない。自分を文人よりも一段高い者とみなし，彼らの庇護者を気取っていたのである。

> do you know that I have taken more pains to recommend the Whig Wits to the favour and mercy of the Ministers than any other people. Steele I have

kept in his place; Cogreve I have got to be used kindly and secured. Rowe I have recommended and got a promise of a place——and I set Addison so right at first that he might have been employed; and have partly secured him the place he has.

Journal to Stella. Letter LVII. Dec. 27, 1712.

彼のこのような態度を他の作家がどう思っていたかは十分想像できよう。Steele などは「貴様の世話になった覚えはない」と啖呵をきった手紙を書いている。

Fielding や Richardson の作をもって英国の小説の嚆矢と考えるならば，Swift は純粋の小説家ではなかった。小説家の問題にするのは普遍的命題ではなく例題である。すなわち彼らの扱う対象は個々の人間である。これに対して諷刺家にとっては人間は自己の諷刺しようとする悪徳の象徴に過ぎない。個人に関心を持ち，これを描写するのは諷刺家の仕事ではない。文学の様式が現在よりも明瞭な境界を有していた時代において，Swift は自己にもっとも適した分野を選び，その分野の可能性を最大限に発揮し，しかも他を侵すことのない作品を生みだしたのである。文学においても伝統を重んじた彼は時代が諷刺文学に与えた定義をもっとも忠実に守ったのである。諷刺の領域を出て，小説家になるには，人間個人への関心が欠けていたのではないだろうか。これは歴史家として致命的な欠陥であった。彼には現代史を著述したいという夢があり，historiographer の地位を望んだこともある。しかし *History of the Four Last Years of the Queen,* や *Memoirs, relaling to That Change which happened in the Queen's Ministry in the Year 17 10,* や *An Enquiry into the Queen's last Ministry* などの作品を見るとき，彼がその希望を果たさなかったことを残念には思わない。*Gulliver's Travels* の著者の手になるものでなければ，これらの作をかえり見る人などいないであろう。メモワール・ライターとしても彼は三流であった。十七世紀後半から十八世紀にかけて，英国には Pepys の日記や Lord Hervey の覚書きが書かれている。フランスには Saint-Simon や枢機卿 Retz があらわれた。また Swift は Comines の *Memoirs* や Clarendon の *History of the Rebellion* を読んでいる。手本が無かったわけではない。Swift のように政治上の事件を述べることが目的である場合には，記す事実に対して冷ややかな傍観者になるか，あるいは逆に党人に徹する以外に自己の作品を興味あるものにする道はない。Swift のとった態度は中途半端であり，したがって残されたものはきわめて生温いものになっている。おそらく *Short Character of Lord Wharton* を除き，精彩ある性格描写は彼の作品に皆無といってよい。

VII

Somerset Maugham は *Ten Novels and their Authors* において，10 人の作家がそれぞれ時代の世界観を，なんらの疑問も持たずに受け入れていたことを語っている。Swift も例外ではなかった。なるほど彼の冷ややかな人間観の形成には彼の性

格や体験も寄与したであろう。しかし人間の堕落を激しく告発するときに，彼の念頭にあるものは，自分は昔ながらの教訓に従っているに過ぎないという意識である。次の文は Thomas Sheridan への手紙の一節である。

> You should think and deal with every man as a villain, without calling hin so, or flying from him, or valuing him less. This is an old true lesson.
>
> Sept. 11, 1725.

人間性が本来善であるか悪であるかは，古今の哲人が論じて結論のでない問題である。どちらの説を唱える人にも，その人に対して倫理的な判断を下すことはできない。しかし人間の尊厳を主張する新思想の生じた原因を考えれば，それを奉じた Addison や，あるいは性悪説に固執した Swift が当時いかなる立場にあったかが明瞭になると思う。Addison らが人間の知性や善意に寄せた信頼は楽観的過ぎたかも知れない。しかし彼らにはその必要があったのである。当時は人間が教会や国家によってあまりにも支配されていた時代であった。その支配から人間を解放するには，人間が国家による指導を受けなくても，真理と善に到達できることを主張しなければならなかったのである。人間に自由を与えるためには，その独り立ちを助ける悟性と良心とが人間に十分に備わっていることを明らかにする必要があったのである。人間性善説それ自体の当否は別にしても，これが近代の民主主義の母胎になったたことを思えば，確かに一つの進歩である。他方人間性悪説は the organized authority of state and church を支える基礎であった。忠実な国教徒の Swift が性悪説に加担したのは当然である。しかし彼は，ひとり進歩に抵抗して，旧思想の孤塁を守っていたわけではない。我々は歴史を振り返ってみるとき，新思想の華やかな誕生のゆえに，しばしば旧思想の勢力を過少評価しがちであるが，事実はむしろその逆であることを忘れてはならない。Swift の立場は実は殆どの同時代人が共にしたものなのである。

彼が同時代人と共にしたものは人間観だけではない。独創性が尊ばれるものではなく，むしろ疑いの目をもって見られた時代に生きて，Swift の願いはあらゆる面において正統派となることにあった。しかし彼は理念によって行動を支配することをしなかったから，彼が正統と異端の間にしいた境界線は矛盾に充ちたものになり，また移動しやすいものになった。orthodoxy が侵されつつあるという危機感だけを抱いて，何を守るべきかを知らなかったのである。したがって古来の思想や制度の維持に，是非の疑問を持たずに努める以上の目標を発見できなかった。結果的には自分のおかれた環境において，もっとも勢力のあるグループに加担することに終わったのである。いかなる社会においても，殆どの人間は保守的だからである。大衆は守るべきものを知らない保守主義者である。そして Swift は彼らの一人であった。

彼の凄まじい諷刺に眩惑されて，彼の本質が保守性にあることを見落としがちである。Drapier's Letters 事件において，彼はデマゴーグとしての才を遺憾なく発揮

したが，破壊にのみ彼の行動が終始したわけではけっしてない。Dr. Johnson の Boswell に語った次の言葉は知識人がひとしく政治に抱く絶望の声であろう。

I would not give half a guinea to live under one form of government rather than another.

Swift の政治に対する態度は Johnson のように投げ遣りなものではなかった。彼の政治上のパンフレットは常になんらかの建設的な目的を有しており，その努力において彼は真摯であった。彼の意識においては，自己の文学的才能は政治上の目的に捧げるものであり，その目的の達成は文学上の成功以上に重要であった。*Conduct of the Allies* は当時スペイン継承戦役のさなかにあった英国に，戦争の得にならないことを説いたパンフレットである。現在読んでも，面白くもなんともないものであるが，実際的効果をもたらした点では，*Drapier's Letters* に並ぶものである。Swift にはそのことが Gulliver's Travels の名声に劣らず嬉しかったに違いない。

The House of Commons have this day made many severe votes about our being abused by our allies. Those who spoke, drew all their arguments from my book, and their votes confirm all I writ;

Journal to Stella. Letter XL. Feb. 4, 1711—12.

George Orwell は *Politics vs. Literature* において，*Gulliver's Travels* の第四篇を批判し，Houyhnhnm の変化のない社会の内に全体主義の萠芽を発見している。Quintana は歴史の中に Swift をおいて見るべきであると主張して，Orwell に反論しているが，Orwell の見解に全く理がないわけではない。全体主義に理論を与え，これを組織的に強制しようとする試みは二十世紀の産物であるにしても，為政者が固定した社会や盲従する国民を欲することは古今を問わないからである。Swift はその保守性のゆえに，何物にもまして秩序を尊び，社会の安定を願った。安定した社会は社会を構成する個人のためであることを知らずに，社会それ自体が目的であと考えた結果があの Houyhnhnm の死んだ世界である。Swift のような考へ方は珍しくはないが，全体主義の温床になりやすいのは事実である。彼の保守性は政治において発揮されたばかりでなく，国語の永遠の固定化をも願って，Johnson の嘲笑を買った。

Swift の悲劇は彼が守るべく誠実な努力を傾注したものが現在ことごとく意味を失っていることである。一つには彼が実際的な男で，その義憤の対象が眼前の不正を出なかったためであり，一つにはその関心が常に過去に向けられ，自ら理想を建設することがなかったからである。彼が未来に夢を描かなかったのは漱石の主張した pessimism のゆえではない。未来に希望を託すことは勇気のいる仕事である。彼にはその勇気も想像力も無かった。大衆がイソップの教訓を守って a bird in the hand を大切にするように，彼らの一員である Swift は，滅び行くことを知らずに必死に彼の現在の維持に努めたのである。したがって今日彼の作品に意義を与えているものは，彼の思想ではなく，純粋に文学としての価値なのである。Thackeray

は *Drapier's Letters* を評して，"one admires not the cause so much as the strength, the anger, the fury of the champion" と語っているが，これは Swift の作品全体にいえることであろう。彼が守らんと欲した信念が意味を失い，その信念を盛る器のゆえに彼の名が後世に伝わるのはまことに皮肉といわねばならない。

Ⅷ

以上で漱石の Swift 論の前半に関する批評を終わる。彼の描いた Swift は，いささか誇張すれば，神々の権威に抵抗する孤独のプロメーテウスの面影がある。強烈な，魅力のある Swift 像である。しかし実際に Swift の作品の内に発見するものはこれとは大いに違っていた。それにしても漱石の Swift に対する傾倒は，自ら持ずることの高い彼だけに，印象的である。共に幸福でなかった少年時代への同情であろうか，他のいかなる作家にも示したことのない共感を Swift に寄せているのである。彼は Swift に姿を借りて自分自身を語ったのであった。彼の描いた Swift 像に敬意と感動を覚える人があれば，それは Swift に対してではなく，漱石自身に向けられるべきである。

（後　記）

従来の Swift 批評に対する意識的な反発を多少こめて，自分なりの Swift 観を提出しようと試みたつもりですが，従来の批評の内容に触れなかったので，無意味な事実の羅列にしか映らぬのではないかという危惧を感じています。昨年（1965）の夏に仕上げたものに，厨川文夫教授の御注意を頂いて，書き直しました。御厚意に感謝するとともに，十分それを活かせなかったことを残念に思います。